

大河ドラマの主役にしたい人物・立花宗茂

葛南支部 小浦泰之

2016年の大河ドラマ「真田丸」も好評のうちに終わり、2017年は「おんな城主直虎」が始まりました。井伊直虎は実は男だったという資料の存在もあり、個人的には井伊直虎＝男という説を支持しておりますが、大河ドラマはあくまでもドラマなのであって、フィクションであっても一向に構わないと思っております。いかに視聴者を飽きさせずに1年間のドラマを作り上げるかが、脚本家の腕の見せ所だと思います。

そんな大河ドラマの主人公に是非して欲しい、と私が昔から思う人物が立花宗茂です。なかなか波乱万丈の人生を歩んだ宗茂は、ドラマにするにはぴったりの人物だと思っております。

今回は立花宗茂の生涯を振り返りながら、ドラマ化に向いている点、不向きな点について考察していきたいと思っております。

尚、立花宗茂は生涯に何度も名前を変えておりますが、本稿では一番有名な宗茂で統一させていただきます。

① 立花宗茂

(1) 誕生～立花家の養子へ

立花宗茂は1567年、九州の有力大名大友家の重臣である吉弘鎮理（のちの高橋紹運）の長男として誕生したとされています。伊達政宗や真田信繁と同年の生まれということになります。

宗茂は高橋家の大切な跡取りとして、父紹運の厳しくも温かい薫陶のもと育てられ、幼年の頃からその才気の片鱗を見せ、将来を嘱望されるようになります。

そして、その才気を見込んだ立花道雪（戸次鑑連）に目をかけられ、立花家への婿養子入りを打診されます。

道雪には男子がなく、一人娘の閨千代が家督を継いでいましたが、主君大友宗麟の勧めもあり、しかるべき人物を婿養子に迎えたいと考えていたのです。

父の紹運は、大切な嫡男であり才気に溢れる宗茂の婿養子入りに抵抗感を示して断りますが、同僚であり、同じ大友家の重臣である道雪に何度も懇請され、最後には立花家入りを認めます。

こうして、立花宗茂が誕生することになります。

妻の閨千代とは終生不仲であったようで、二人の間に子はなく、道雪の死後ほどなく別居しています。男女の間のことは余人が推し量るべくもないのですが、自ら城を守り戦闘に参加するような男勝りで勝気な妻と、婿養子としての立場など、勝手に想像を膨らませると面白い物語ができるような気がします。

因みに、高橋家は弟の統増が跡を継ぎます。この統増はのちに立花直次を名乗り、子孫が三池藩を設立します。麻生太郎元総理は、この統増の11世の子孫です。

(2) 初陣～養父と父の死

立花家に入った宗茂は、程なくして 14 歳にして初陣を飾り、敵将を一騎打ちの末討ち取る活躍を見せます。

しかし、生来のん気な性格であったと言われる宗茂は、お坊ちゃん気質が抜けなかったため、鬼道雪と恐れられた猛将である養父に、今まで以上に厳しく育てられ、武将としての基礎を叩き込まれます。

その後も連年出陣し、養父や父の戦いぶりを間近で見ながら、武将としての才能を磨いていきました。

1578 年の耳川の戦いに敗れたあと、斜陽の大友家は、道雪や紹運の活躍で何とか領土を維持していたものの、勢いに翳りが見え始めていました。

そして 1585 年、軍神と称えられ、抜群の統率力を誇った養父の道雪が病死すると、大友家には厭戦気分が蔓延し、士気が著しく低下していきます。

その状況を見た島津家は、龍造寺家を降伏させた勢いをもって、ついに大友領に大侵攻を開始します。総勢 2 万の軍勢で、宗茂や紹運が守る筑前に進軍を開始しました。

父紹運は、最前線の岩屋城にわずか 800 の兵で籠城をし、決死の覚悟で島津軍を迎え討つことにしました。再三にわたる降伏勧告に耳を貸さず、岩屋城攻防戦が始まります。

2 週間にわたる激しい戦闘の結果、岩屋城は落城。紹運は高櫓に登り、敵兵の前で切腹して果て、城兵は全員玉砕しました。しかし、勝った島津軍も夥しい損害を受け、態勢を立て直すのに時間を要します。結果的にこのことで、豊臣軍の来援が間に合い、宗茂や家族の危機を救うことになりました。

父の戦死を聞いた宗茂は、取り乱すことなく、自らが守る立花山城の籠城の準備を進めます。やがて島津軍が現れ、立花山城でも戦闘が開始されます。

宗茂は積極的に夜襲や遊撃戦術を用い、数十倍の兵力の島津軍に多大な損害を与えます。先に岩屋城でも大損害を受けていた島津軍は、豊臣軍来援の報に接したこともあり、これ以上の戦闘は無理と判断。撤退を開始します。

宗茂は援軍を待たずに手勢 500 を率いてこれを追撃、甚大な被害を与えたうえ、奪われていた岩屋城、宝満城を再奪取し、父の無念を晴らします。

このあとも豊臣軍の九州平定の先鋒として大活躍し、豊臣秀吉から「その忠義、鎮西一。その剛勇、また鎮西一」と称され、筑後柳川 13 万石の直参大名に取り立てられたうえ、従五位下侍従に叙任されます。

肥後の一揆討伐や、小田原征伐にも従軍し、並み居る諸大名の前で秀吉から「東の本多忠勝、西の立花宗茂、東西無双」と評価されます。

この秀吉による厚遇は、のちの関ヶ原の戦いで、宗茂を西軍に参加させる大きな要因になったと考えられます。

(3) 朝鮮出兵～関ヶ原の戦い

1592 年に始まる文禄の役では、小早川隆景率いる 6 番隊に属し、碧蹄館の戦いでは先陣を務め、重臣が多数討ち死にする乱戦のなか、自ら刀を振って奮戦し、日本軍勝利の立役者とな

りました。宗茂の刀は歪んで鞘に戻せなくなったといえます。

隆景は「立花家の 3,000 は他家の 1 万に匹敵する」と評価し、秀吉から「日本無双の勇将たるべし」との感状を拝領する榮譽に与ります。

1597 年からの慶長の役では、前回の出兵での損害が考慮されたためか、侵攻軍には加わらず固城の守備を命じられます。

秀吉の死と共に日本軍は撤退を開始しますが、小西行長が海上を封鎖されて撤退が困難になっていると聞くと救援に赴き、李舜臣の水軍を打ち破って無事に撤退を成功させます。

このように朝鮮でも武名を上げた宗茂の武将としての評価はさらに高まります。

そして 1600 年の関ヶ原の戦いでは、徳川家康に法外な恩賞で東軍に味方するように誘われますが、秀吉の恩義に報いなければ武士ではないと言い放ち、反対する家臣の意見も退けて西軍に味方します。

本戦には参加せず、大津城の攻防戦に加わり、あと一步で落城というところまで追い詰めますが、西軍が関ヶ原で敗退したという報を聞くと大阪城に撤退します。

総大将の毛利輝元に大阪城での徹底抗戦を訴えますが、輝元は退けたため自領の柳川へと撤退を開始します。

その際、関ヶ原から逃れてきた父紹運の仇である島津義弘と同行します。家臣はこの機に父上の恨みを晴らしましょうと進言するも、「敗軍を討つは武家の誉れにあらず」と退け、むしろ島津軍の護衛を買って出ます。このあたりは「人となり温純寛厚。徳ありて驕らず。功ありて誇らず」と評された宗茂の面目躍如といったところでしょう。

柳川に帰っても徹底抗戦の構えを見せますが、朝鮮で苦楽を共にした黒田如水や加藤清正の必死の説得に応じ、宗茂は開城降伏しました。

(4) 浪人～大名復帰

戦後宗茂は改易され、浪人となります。肥後の加藤清正や加賀の前田利長から仕官を勧められるも断り、家臣と共に京都に出ます。京都では旧家臣や他大名からの仕送りを受けて生活をしていました。

このころの話としてこんな逸話が残されています。

ある時、家臣達が町中に物乞いに出掛け、帰り際に雨が降ってきました。出掛ける前に残飯を干飯にするために庭先に干していたことを思い出し、留守番をしている宗茂が取り込んでくれているか議論となりました。「そんな些細な事に気をかけるような殿ではあるまい」という結論に達し、帰ってみると案の定残飯は放置され、濡れるままになっていました。

細かいことには拘らない、宗茂の大きな性格を物語る逸話ですが、前述のとおり、他大名家からかなりの援助を受けていたようなので、このあたりの話はのちに作られた創作であると思われまふ。藩祖の苦勞を誇張するために、柳川藩で創作した話かもしれません。

ただ物語にするには面白いエピソードだとは思いますが。宗茂にはこのような逸話が多いことも、彼を主役にした物語を描いて欲しいと思う理由の一つです。

しばらく京都に滞在し、そののち江戸に下ります。江戸では本多忠勝の世話になり、忠勝の推

挙で江戸城に召し出され、5千石の旗本として召し抱えられます。

まもなく徳川秀忠のお伽衆となり、陸奥棚倉1万石で大名に復帰します。その誠実で裏表のない人柄から、徳川家からも深い信頼を寄せられ、秀忠の親衛隊長の職に就きます。

大阪の陣にも秀忠の参謀として出陣し、的確な状況判断や数々の献策で勝利に貢献し、戦後ついに旧領である柳川11万石の大名として復帰しました。

関ヶ原の戦いで西軍に参加しながら、旧領に復帰した唯一の大名となります。将軍家のお気に入りとは言え、このような処遇に異論が出なかったのは、偏に宗茂の人となり、万人の認める場所であった所以であるといえましょう。

(5) 幕府重鎮としての活動～死去

宗茂は戦国大名としては年が若かったこともあり、伊達政宗や加藤義明らと共に、徳川家光に戦物語を語る相伴衆としての役目も果たしました。将軍のお供をして行事に参加することも多かったようで、外様大名としては異例の厚遇を受けます。

そのため、国許に帰る時間はなかったようで、死去するまでほとんどを江戸で過ごすことになりました。その篤実な人柄から、将軍家と地方大名との間を取り持つ重要なパイプ役としての役目を果たしていきます。

晩年の1637年に起こった島原の乱にも70歳を過ぎて参戦し、知恵伊豆こと松平信綱を補佐して戦略面の助言を行い、有馬城の攻防戦では立花勢が一番乗りを果たし、諸将から「武神再来」と謳われました。

翌年養子の忠茂に家督を譲り、剃髪して引退。

1642年、江戸にて76歳の生涯を閉じました。

② 立花宗茂が物語に向いていると思う点

- ・戦が異常に強かったこと
- ・誰からも好かれる清廉潔白で高潔な人格
- ・それなのに妻閨千代とは不仲
- ・養父のしごき、父の壮絶な戦死
- ・剣術、弓道の達人で、さらに連歌、茶道、狂言、笛など文化人としても活躍
- ・同時代や江戸時代に残された豊富なエピソード
- ・改易後、大名に復帰する波乱万丈の人生

こうして見てみると、なんでドラマ化されないのだろう？と不思議に思うくらい、物語にするには魅力的な人物に思えるのですが、以下で冷静かつ公平な目で、ドラマ化されない理由について真面目に考えてみます。

③立花宗茂が物語に不向きだと思われる点

- ・知名度が低い

歴史ファンの間では知られた存在でも、一般的には知られていない存在なので、大河の主人公には不向きと判断されている可能性あり。ただ、最近の大河は、特に女性を主人公にした場合、無名の人物を主人公にしているので、知名度は問題ではないかも。

- ・余生が穏やか過ぎる

華々しい死を遂げるわけではないので、物語の終わりを描くのが難しい。

- ・妻と不仲なのに側室もない

妻と不仲であるなら、他の女性に手を付けて大切な家の跡取りを残すことも、武将の大事な務めなのに、側室がいた記録がない。女性に興味がなかったのか？実際に子供はいませんし。最近の大河では男女の恋愛要素も取り込まないと女性視聴者受けしないので、その辺りを考慮に入れると物語の描き方が難しい。ただ逆に、幼馴染だった闇千代だけが唯一の女性だったという話にして、純愛ものに仕立てる余地はある。

- ・朝鮮での戦闘シーンを描けない

宗茂が一番戦闘で活躍したのは朝鮮の役でのことだが、政治的な理由で朝鮮の役は描けない。

- ・数年前に黒田孝高を描いている

同じ九州の大名、黒田官兵衛が大河で主役になったので、九州の戦国武将はしばらく後回しになりそう。来年の大河の主役は、やはり九州の人物西郷なので尚難しそう。ご当地応援的なサスペンスドラマのような要素も、大河にはありそうなので。

色々理由はあるようですが、「知名度が低い」これが一番の理由かと推測します。

④最後に

今回は、個人的に大河ドラマの主人公にして欲しい人物として、立花宗茂を取り上げましたが会員の皆様もそれぞれ、この人物を描いて欲しいという希望があるかと思います。

是非この人物を！というご意見がおありの会員の方は、例会の際にお聞かせください。

最後までご拝読ありがとうございました。